
俺があなたで私がボクで？

紅葉ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺があなたで私がボクで？

【Nコード】

N7263Q

【作者名】

紅葉ケイ

【あらすじ】

おしゃべりな魔剣と聖剣を持った…の物語。

作者は小説初心者です

プロローグ

「えへへ…。今…まであ…りがとうねえ…。」

暗闇の中、少女の弱々しい声が響く。

『馬鹿が…。助からねえぞ？』

「いーの。…暖か……かった。嬉しかった。次……生ま……れ変わるなら…。」
掠れた声が止まる。

「………………。」
人形のように整った顔の少女が口をパクつかせる。もう声が出ないのだ。

『おい、おいっ！』

必死に口を開くが、言葉にならず。

少女は諦めて瞳を閉じる

『……………。』

『ちくしょうが…。俺様にごここまでさせたんだ。覚悟しとけよお…』

『！』

出逢い（前書き）

始まるお（＊、＊）

出逢い

日が当たらないのに、いつもうつすらと明るいダンジョン、迷宮。モンスターが死んでも死んでも復活する迷惑な所。ボクはとても鬱なテンションで両腰に吊るしてある、おしゃべりな魔剣と聖の話聞いていた。

『ギャハハハまさか本当にいいやがるとはなあ！馬鹿ジュノお、ギャハハハハ』

右腰に吊るしてあり、とても口の悪い魔剣、フレイア。こいつの口の悪さは尋常じゃない。本当に、ああ言えばこいう…！って言いなくなるような魔剣である。

『うつうつ…！フレイアが嘘をつくからあ…！』

反対の腰に吊された聖剣、ジュノが呻く。真面目で天然でどじつ娘である。

「ああ…。鬱だあ…。」ポツリと呟くとフレイアが下品な笑い声を、それはそれは嬉しそうにあげる。この野郎…！

『ごめんねサキちゃん…。』

『ギャハハハ奴隷が増えてよかったじゃねえか、ギャハハハ！』

「くそう…。はあ…。」

二つの剣の持ち主、ボクことサキヤはため息を一つ。あの変態がさるに変態になるなんて…。

ことは昨日…。

ボクは迷宮F七十九回でストーリーカーに出逢った。

うまくあしらうことができず、困っているボクに、ジュノは…。

『私に任せてください！追いついて見せます！』

自信満々の声で言われ、もう面倒だったボクはジュノに任せてしまった。任せてしまったのだ。

この二つの剣には、たくさん能力があつて、そのうちの一つに身体を分け与える。いわゆる憑依みたいなものがある。ボクは身体をジュノに受け渡し、ストーカーを追い払ってもらうことにしたのだ…。

ジュノはいきなりストーカーの腕をとった。

「サキヤ様っ?!」期待に目を輝かせる少女。恐らく十代後半であろう。その歳でストーカーってどうよ、と言いたくなるような少女である。

頬を赤く染め、期待に満ちた目で見つめる少女をジュノは背負い投げた。

背負い投げた。

綺麗に地面に叩きつけられた少女。

仰向けに倒れる少女に近づき……。

髪の毛をつかみ……。

「ボクにさわっていいと思ってるの？この薄汚い××××××××」

[illegible]

余りにも酷くて思い出したくもない。

それを聞いた少女は。

「サキサさま……！この薄汚い雌豚にお仕置きを……！」

なにかに目覚めていた。

その後、身体の支配を無理やり返してもらい。少女の鳩尾にグーを一つ。

意識を奪ったあドラゴンでも破れないロープで縛り上げ、転がして逃げてきて今に至る。

鬱だ。
変態とか死ねばいいのに。

なんだかんだでばやきながら歩くこと1日、やっとF三十二回。

F三十にはゲートと呼ばれるワープアイテムがあり、そこまでたどり着けば外に出られる。

やつと外だー！

思わずスキップしそうなぐらいテンションがあがったときだった。

「そのアイテムを寄越せ、殺すぞ。」

なんか恐喝現場にたどり着いてしまった。

恐喝されているのは、綺麗なお姉さんでした。
耳が尖ってる…。エルフかな？

エルフというのは人間より魔法に特化した…。人間である？ボクには違いがいまいちわからない。フレイアに言ったら鼻で笑われたけど。

数人の男がエルフのお姉さんを囲んでいた。

「…ふーん…。死ぬのは君たちだと思うけど？」エルフのお姉さんの声が響く。

ハスキーボイスがなんかいい！

『声フェチ変態野郎が…。』

『サキちゃんが変態でも私はついていくから！気にしないで！』

「ええ?!いつからボクは変態認定されてんの?!」

「……………」

「……………」

「……………」

見事に気づかれた。

しかも、かなり痛い目で見られてる?!
えっとうなったら…!

呆然としてる一人の男の顔に膝を入れる!

「ぶはっ?!」

「お姉さん、助太刀いたすっ?!」

「……………」

「あー…。ありがとう?。」

何故か凄く微妙な空気に。

あれ?なんか目がしょっぱい…。

さて、ボクはなんだかんだで腕には自信がある。

この迷宮は今のところF百三十四回までは確認されている。その先はまだ不明である。

しかし百三十四回というのは、かなり凄腕な冒険者を集め、パーティーを組み、全員が全員死ぬ気で頑張ってたどり着いた階層である。

ボクはソロ、一人で百三十まで行ける。ただしかなりボロボロになるし、探索も長時間は無理だけど…。

初級者、冒険者になりたてだと、行けてもF十分回ほどである。中級者で三十ほど、上級者が五十ほど。

つまりだ、数値だけでみると、ボクは化け物並みであって、不意打ちや手加減やハンデを与えない限り、たかだか三十二回のチンピラに普通なら負けるわけがないわけで…。

エルフのお姉さんが呪文を完成させるまでの十秒ほどで、男たちはみんな地面にキスをしていた。

「……………」

魔法の継承を辞めて、こっちを見つめるお姉さん。ヤバい、とにかく言わなきゃ…！

美形に見つめられて焦るのは世界の常識だよね？！

焦りすぎたボクはアホなことを口走った。

「あの、えっと…？お茶でもどうですか？」

『アホが…』

フレイアがなんかいつてるけど聞こえない。

お茶をする。(前書き)

Σ(´・ω・｀) 本文に書き忘れましたが、魔剣と聖剣の声は、剣に触れていなければ聞こえません

お茶をする。

「……………」

ギルドと呼ばれる。要は仕事を紹介してくれる所。冒険者を取り締まったりもしたりしているらしい。国の中にはたくさんのギルドがあつて、ボクが所属しているこのギルドはマタタビの唄と言つ名前である。

名前の通り可愛い外装で、可愛いカフェがある。ボクとエルフのお姉さんはそのカフェにいた。

勢い余つてナンパしちゃったけど、このあとどうしよう…！

「…私は、フロー・ケイリア、貴方は？」耳に優しく響くハスキーボイス。ああ…癒される…。

『変態が…。』

うるさいわ。

「そういえば、自己紹介もまだでしたね…。ボクはサキヤ・クローバです、よろしく願います！」

「…。サキヤ？覚えた。」
ハスキーボイスで名前を…。うあうあ、心臓を抉られるような…。！
そんな感じ…。！

『サキちゃん…。』
哀れみの目でボクを見ないで？！
いや、君らに目はないけどっ！

「まずは、助けに来てありがとうございます。」
にこりと微笑まれる。思わず顔に血が集まる。美人の微笑みは罪だ
と思うんだ…。！

「いやいや、ボクがいなくても、お姉さん。フローさん一人であれ
ぐらいなら相手にできたでしょ?」

そうなのである。フローさんの装備に杖があるんだけど、よく見たら、ドラゴンの角で出来てるみたいなんだよね。

ドラゴンが出るのはF五十五階以上。

つまりフローさんはかなりの上級者なわけで、あんなチンピラボクがいてもいなくても変わらず倒せたわけである。

「確かに、貴方がいなくても、倒せたかも知れないけど……。私は魔法がメインの冒険者だから、剣士を相手にするとさすがに厳しいの。だから、ありがとう。助かりました。」

なななななな、なんていい人なんだ……！前に助けた人なんて……。

「サキヤ様、どこまでもついていきますう、
だったか？ギヤハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ」

助けたらストーカーになったのに！

『フレイア、あのストーリーのせいでサキちゃんの世界観というか人間性が壊れた気がするの。』

「ギャハハハハハハハハハハハハハハハハ、あいつが狂ってんのは最初からだろおがお。ギャハハハハハハハハハハ」

え、ちよ、なんでボクこんな扱いに?!

君たちの主人はボクですよー？

「……で、話の途中で悪いんだけど、あれ、なあに？」

フローさんがボクの後ろを指差し苦笑いを浮かべる。

ん？後ろに何が…？

カフェのショーウィンドウにへばりつきこちらをじっと見つめているストーカーがいました。

「……………無視してください。」

「……………わかったわ……………」

どうやって脱出しやがった…。あのやろっ。

しばらくストーカーを無視して雑談していると、ストーカーはフロ―さんを悔しそうに睨み付けたあと、涙を流しながら帰っていった。なんなんだよ、面倒だなあ…。

「なんていうか…。面白いお友達ね…?」

「友達じゃないですから…!」

いや、ほんと切実につ!

「そういえばさっきカツアゲされそうになってたアイテムってなんなんですか?」

あんなごみく……。雑魚が格上の相手を狙うってことはそれなりに

価値のあるアイテムなんだろう。

「ああ……。あれは……。」

そのときボクの視界が柔らかいなにかに遮られた。

「サキちゃん、ギルドに着いたら真っ先にお姉ちゃんのところに
来るようにいつてるでしょー？」

「むぐつぐぐ?!」

『『あー……。』』

「ぎ、ギルドマスター?!」

フローさんが驚きのあまり少し裏返った声を出す。

とりあえず、ボクに抱きつくギルドマスターこと、ボクの姉を引き
剥がす。

「やんっ」残念そうな声をだす馬鹿姉、そろそろ自分の歳を考えて
欲しい。今年で二十七だったかな？

「やんっじゃねえよ!馬鹿姉さん、酸欠で死んだらどうしてくれる
のさ!」

「姉さん?!」

フローさんが目を丸くして固まっている。あ、この表情なんかいい。
姉さんがフローさんを見て目を見開く。

「サキちゃん……!やっとな友達ができたのっ?!」

「ボクはみんなからどんな目で見られてるの?!」

ギルドのカフェでボクの声が響きわたった。

もういやっ！なんでこんなに扱いがひどいのっ？！

「サキヤだし」。

「サキちゃんだし…。」

[illegible]

結論

店員さんに怒られました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7263q/>

俺があなたで私がボクで？

2011年10月8日17時46分発行